

11月度「京都学ラウンジ ミニ講座」（開催報告）

平成30年11月22日
京都学・歴彩館
075-723-4835

京都学・歴彩館では、京都について学ぶ楽しみを広げる目的で、毎週木曜日に「京都学ラウンジ ミニ講座」を開催しております。この度11月1日（木）～11月22日（木）にかけて「〃贈り物〃から室町時代を考える」と題して、4回開催しましたので、下記のとおり報告します。

記

- 日 時 平成30年11月1日・8日・15日・22日
いずれも木曜日13：30～14：00
- 会 場 京都府立京都学・歴彩館 京都学ラウンジ
- 参加者数 34名（1日）、55名（8日）、37名（15日）
33名（22日）、計159名

■ 内 容

講師 京都府立京都学・歴彩館 京都学推進課 川口成人

「〃贈り物〃から室町時代を考える」（全4回）

第1講 それは賄賂なのか？

第2講 室町幕府・大名家の財政と贈与

第3講 〃贈り物〃の循環

第4講 遠くのくにからの〃贈り物〃～〇〇が室町日本にやってきた！～

■ 講座の様子

11月は室町時代の様々な贈答を主題とした講座を開催した。第1講・第2講では、主にお金の贈答を対象とした。当時の訴訟や任官の手続きには、現代でいう賄賂に該当する礼銭・礼物の授受が不可欠であった。そのため幕府の官僚をはじめ、礼銭収入が生計の大きな割合を占める人々は少なくなかった。また室町幕府や大名家においても、寺院からの贈答物の流用や配下の被官からの献金といった贈与に依存する財政運営がとられていた。室町時代の国家と社会の双方において、贈答は不可欠な行為であった。

第3講では、モノの贈答を対象とした。現代でも、人からの〃贈り物〃を他の人に贈ったり、配ったりすることは少なくない。それは室町時代でも同様であった。一方、将軍と天皇のあいだで同じ刀剣が贈答されたように、現代からみて不可解とも思える行動もあり、当時の贈答をめぐる社会通念の一端を垣間見ることができた。第4講では、京都に集う様々な〃贈り物〃として列島各地の特産品、南蛮（パレンバン）から贈られた象などを取り上げ、それらが果たした役割についても触れた。

東寺百合文書以外で日本中世を取り上げたミニ講座は初めてということもあり、多くの来場があった。終了後には来場者から鋭い質問が出され、白熱した議論が繰り広げられた。

